

# ALLSORTS

Vol.

20

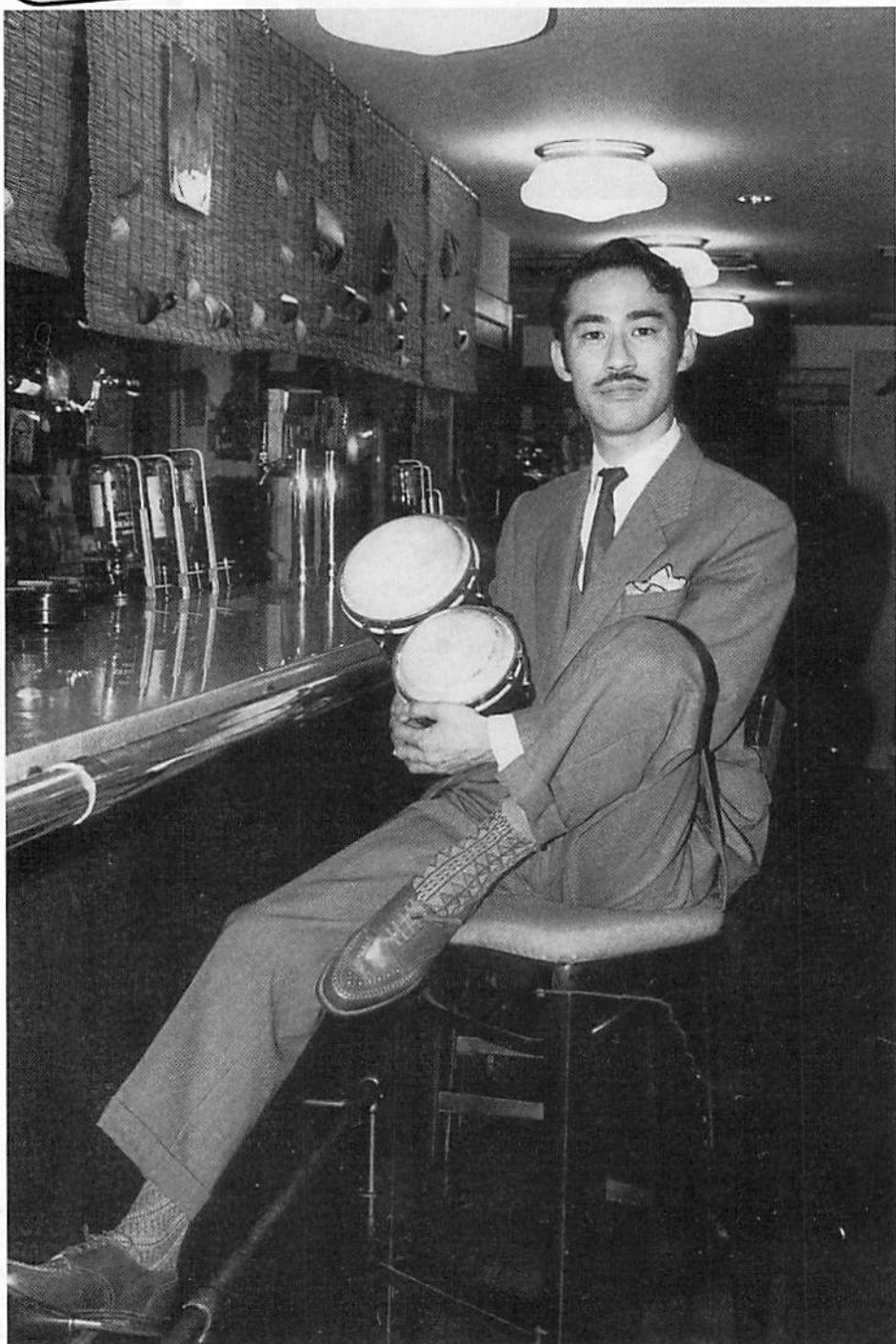
## PROFILE

本名は安藤文雄。昭和27年京都市に男三人兄弟の末っ子として生まれる。高校卒業後、空間デザイナーを経て音楽業界入り。10年以上あるほど数々のバンドでドラマー、パーカッションistとして活躍のあと、自らのバンドを率いて84年にデビュー。ムゼオテルアンディをパワーアップさせた京都一のビッグバンド・ランデブーを率いて、現在ライブハウス・バーティなど幅広く活躍中。実母、妻ともに西京区在住。

アンディ ANDY  
ミュージシャン

TEXT by 小林明子  
PHOTO by 大田メグミ

ライブにPLAY&SINGが人生だ。



雨の降りしきる日のこと。彼は濡れた頭を気づかぬが、細い体をドアの隙間から滑り込ませるように入ってきた。「おはようございます」軽く会釈した口元がとても優しくだった。

ラムセットがどうしてもほしくって、母親にねだったのである。「なんか楽器がやりたかった。で、ドラムなら音階もないしやりやすいだろうと思った」のが動機。最初は母親も渋っていたが、ある日家に帰ると部屋にはそのドラムセットが置いてあった。電気音楽—不良という図式がまかりとおっていた時

代なのに、随分理解のあるお母さんである。「母親自身が若い頃からお琴に三味線、マンドリンを趣味だけと演奏しててね。年取ってからでもハーモニカ吹いたり歌ったりしているからね。理解があったのかな。とにかくアンディはその後ドラムに大熱中。すぐさまバンドを作り翌年の夏には日本海の海水

浴場の専属バンドとして念願のデビューを果たすのである。「バンドのメンバーが6人、マネージャー役やらローディー役やらがついてきて総勢10人以上の大所帯。民宿の敷地で寝ること飲む・食うをさせてもらうかわりに、民宿のおやじが夜飲んで歌う時の演奏をするっていう約束でし

た。2〜3週間いたかなあ。さすがに期間が長いからうちの親が中心になって動いてくれて、メンバーの親が全員集まってケンケンガクガク。結局みんなの許可をもらうことができた」大阪大学のドイツ語の教授をしていた父、音楽好きの母、理解ある二人のもとに生まれたこともラッキー要素のひ



目が悪いのでいつも眼鏡を愛用しているが、よくショーヘイに間違われるとか。古着を愛用することが多いらしいが、かなり細身なので舶来ものの古着は体に合わないらしい。したがって昔のジャバニーズフルギを探しては着用しているらしい。撮影用に持参していただいたボンゴはアンディの音楽歴と同程度に古いものとか。牛の皮で作られていて、こなれた良い音を出してくれる。アンディは実は今まで飛行機に乗ったことがない。ラテン系の国に憧れてはいるが、憧れすぎて本当の姿を見るのが嫌なのだから。もっぱらラテン系の外国人に話を聞いては、イメージを膨らませているらしい。



音階がないから、簡単そうに見えるからと

ドラムをはじめた少年がいた。

やがて打楽器は彼をとりこにし、手放しはしなかった。

芸のある、人を楽しませることのできるミュージシャンへ、

彼は一段一段、確実にのぼりつめてゆく。

とつだったのである。

中学高校時代をバンドの明け暮れで過ごしたアンディは、大学へは進学せずにウインドウデイスフレイを手がけるデザイナーの道へ。3〜4年その世界に浸って新しい仕事を順調にこなしていたが、心の底にくすぶる音楽への思いを断ち切ることができなかった。「やっぱり演奏したい」いてもたってもいられないようになり、いつしかデザイナーをやめ祇園でバックバンドの一員として演奏していた。72年、グラントファンクやツェッペリンが来日を果たし、第一次ハードロックブームが終った頃のことである。

「パーカッション全般がこなせたんで、便利というが、重宝している人などころで使ってもらえた」とかで、オールデイズやドワーアップ、パンクファンク、ノンカテリアンズとあらゆるジャンルのバンドに参加した。初期ローザルクセンブルグのドラマーをしていた頃のこと。「所詮バックはいつまでたってもバックだよなあ。ここらでいつちよ前に出ようか」と。ヴォーカルデビ

ューを果たすべく初めて組んだバンド

の名前は、アンディ&ヒズファイヤークラッカーズ。今から9年前の出来事である。その後、ムゼオテルアンディを結成。マンボやルンバを駆使したオールドラテンとジャズのスタイルに、アンディのポーカーと自由で楽しいパフォーマンス、フラメンコをフューチャーするなど、型にはまらないラフなステージングが人気を呼んだ。「ロックを長いことやりすぎて、自分が生まれてからできた音楽はやめようと思っただけです。ウケルかどうかなんてわからなかったけれども、自分のしたいことをやってみたかった」からそんなスタイルを選んだらしい。理由はどうであれ、とにかく明るくて楽しいステージに、聴衆も思わず体を動かしてノックテシマウ。そこが醍醐味だ。

さらにトランペットとサクソスを加えてパワーアップ。総勢14人というビッグバンド・ランデブーがつい先ごろ再スタートをきった。「最低でも月に1回は大阪や京都でライブをやるとういうのが当面の合言葉。そのほかにもパ

ーティやジョイントの声がかかって、

今本当に楽しくなってきました。生地探しから仕立てまで、専属衣装デザイナーの奥様も良き理解者だ。「良い話があれば、東京にも行ってライブしてみたいんです。それから夢は、全然宣伝してくれなくてもいいから、一度メジャーレーベルからレコードを出すこと。リリースできれば売れなくてもいいんですけどね」と笑った。ほかにも夢はいっぱいある。もしできることならば「10組バンドを組んでみたい」とも。「どんなジャンルでも、音楽は楽しい」と思うから、できることなら10タイプの音楽をやってみたいというのである。だから、その時々にはなりきってひたりきってパーフェクトを目指すけれども、ジャンルにこだわっているわけではない。だからひよっとしたら来年は全く違う音楽をやっているかもしれないのだと。「最終的にはジャンルにこだわらない、エンターテナーになりたいんです」と言った。眼差しが今日一番の真剣さになった。